

ひとりじゃないよ つながってるよ

佐久間直子（福島県）

私たちの「せのうえ子育て支援センター」がある福島市は、地震で建物や道路に被害はあったものの津波の影響はなかった地域です。しかし、福島原発から60km離れているにもかかわらず、風がたくさんの放射性物質を運んできたせいで、子どもたちの外遊びの場がひととき取り上げられてしまいました。

震災直後、職員が利用者の皆さんを地震から守りきれぬだろうか：放射能って何？と、不安がいつばいでひろばを開催すべきかどうか迷っていた時のことです。

「センターや保育所は大丈夫ですか？」

「センターはいつから始まりますか？」

おとなも子どもも少しずつ元気になり、涙を笑顔にかえていくことができたように思います。

お母さん方の中には、いろいろな特技を持っていたり、様々な仕事をしていた方がいます。23年度は震災に関係なく、お母さん方に講師になってもらう計画を立てていました。

「子どものへアーカットのコツ」「お部屋の楽しい飾りつけ」「ピアノコンサート」と、身近なテーマにお母さん方も熱心にと、楽しく参加できたようです。講師をしてくれたお母さん方は、緊張したもののやはり楽しかったとのことでした。そんなお母さんの姿を子どもたちは自慢げに見ていました。参加したお母さん方も講師のお母さんを盛り立てようと協力的だったと思います。そこからお母さん方がひとつになり、子どもたちと共に自分たちも楽しいことをやろうと動き出し

と、次々とお母さん方から電話がはまりました。ひろばの開催を待っている人がいる!!

23年度は「ひろばの開催を待っている人がいる」：そのことに応えるためだけに扉を開けたような年でした。私たち職員も不安でしたが、お母さん方はもっと不安で、見えないおもりをつけられているのか、または空気が抜かれているのか、まるで弾まないボールのようでした。そして子どもたちも同じでした。

ひろばに参加した皆さんでたくさん話をしました。地震のあった日のこと、放射能のこと、避難してきたこと、避難すること、話したいこと、話せないこと……。どのお母さん方も一生懸命に耳を傾けていました。決して同情ではなく、お互いの気持ちによりそう姿が見えました。お母さん方と悩み、共感しあううちに気持ちに楽になり、ひとりひとりがつながり、

ました。自分たちで遊び場を開催したり、センターの企画のお手伝いを積極的にする方が増えました。弾まないボールのようだった心がまわりの人に温められて弾みだしたようでした。その様子を見守る職員も元気をもらいました。

ひろばに集う皆さんの心が重なる様子を見守ってきた震災後の1年でした。そして、全国の皆さんの支援の声もとても心強く感じた1年でした。皆さんとの出逢いに感謝!!です。

誰かの為になろうとは思わないけど、誰かを思い続けたい…。これからもホッとできる居場所をみんなで作っていきましようね。

ひとりじゃないよ、つながっているよ。

